北海学園大学 経済学部

第9回 市民公開講座

サスティナブル北海道

自然と調和した新しい 地域経済の確立を目指して

「ローハス」（LOHAS）という言葉を、チラホラ耳にするようになりました。「健康でサスティナブル（持続可能）なライフスタイル」の頭文字をとった言葉で、「人と自然にやさしいくらし」といった意味になります。ローハスへの関心と共感は、物質的豊かさを追い求めるだけの人生に疑問を抱きはじめた日本人の間に、急速に広がっています。人と自然の関係がいつまでも健全に続く、シンプルだが心豊かな生活を送りたいと願う人が、老若男女を問わず増えているのです。

「ローハスな生き方」は、社会や経済の仕組みが変わることで、もっと身近なものになると考えられます。例えば、野菜の産地を確認できるようになれば、安全・安心な食生活が容易になりますし、公共交通が便利になれば、自動車の利用を抑制し、地球温暖化を防ぐことができます。社会のあらゆる部門（生産、消費、リサイクル、交通、政治･･･）がローハス志向に変わっていくことが、強く求められているといえるでしょう。

この講座は、本学経済学部スタッフが、北海道の社会や経済の仕組みをどう再構築していくべきかの視点をお話しします。テーマは、「資源リサイクル」、「農と食」、「都市交通」、「市民自治」など多岐にわたりますが、すべての関心は、孫・子の代まで安全・安心に暮らしていける「サスティナブル北海道をつくる」という点に、向かっているのです。

第1講 飽食の時代の食品リサイクル
10月15日(土) 経済学部 地域経済学科 教授　古林 英一

第2講 安全・安心な食料を北の大地から
10月22日(土) 経済学部 地域経済学科 教授　太田原　高昭

第3講 市民的熟成度と自治の力
10月29日(土) 経済学部 地域経済学科 教授　髙原　一隆

第4講 持続可能な都市と交通戦略
11月5日(土) 経済学部 経済学科 講師　浅妻　裕

第5講 環境にやさしい地域づくり ―エコタウンの実践から
11月12日(土) 経済学部 地域経済学科 教授　小田　清

2005 10月15・22・29日
11月5・12日 毎週土曜日（計5講）

●開講時間／10:30～12:00
（講演後、10分程度の質問時間を含む）

主 催／北海学園大学 経済学部
後 援／札幌市教育委員会

【道民カレッジ指定・連携講座】

econ. 2005
北海学園大学経済学部報　エコン No.12

ゼミナール活動のススメ

ゼミ生座談会

近年、「勝ち組」「かしこい人」「デキるヤツ」などの言葉が頻繁に使われているように思われる。これは、自分で自分をどれだけ磨けるかが、ますます問われる時代になっていることを意味しているのであろう。

自分の能力をじっくりと養成する時間は、人生においてそれほど多くはない。今回、本学部の3人の学生に、本学経済学部で2年生あるいは3年生以上を対象に開講されているゼミナールについてディスカッションをしてもらった。以下を読み、在校生、そして将来、大学進学を目指す高校生には、大学で、そして大講義と違い少人数教育を特徴とするゼミで学ぶことの意味を今一度、考えて欲しい。

越後：皆さんは「高校生のころ、大学の勉強にどのようなイメージを持っていましたか？　そして、入学して実際に勉強してみて、その入学前のイメージと実際はどう違いましたか？」

大西：「高校のときは、大学生活は楽なものであると考えていましたね。大学生イコール遊んでいる人というイメージが強かったのですが、実際はそうではありませんね。」

小林：「僕も大学生活を楽なものと考えていました。たとえば期末試験は、レポート形式だけとか。しかし、試験はどれも難しく、一生懸命努力しなければならないのが実情です。ただ、自主的に勉強するところなのではないかという入学前にもっていた大学に対するイメージはその通りであったと思いますね。」

紺野：「社会に出た後に必要な知識・教養を高めるところだと思っていましたし、私自身、それを目的に入学しました。大学に入ると、様々な授業があり、大変勉強になりますが、多くの友達ができ、遊びのほうも充実しています。」

大西：「経済学を勉強すると、お金儲けできると思っていました。」

小林：「経済学と経営学の違いについて、十分に理解できていないところがありましたね。」

越後：「経済学という言葉が出てきたのでお聞きしますが、経済学部へ入学してよかったと思うことはなんですか？」

大西：「物事に対し疑う目をもつことができたことですね。経済学にはさまざまな論理的考え方があります。これらを学ぶことで、ひとつの事象に対して、多面的に考えることができるようになったことがよかったと思います。」

小林：「受験するときは、正直にいって、なんとなく経済学部を選びました。就職に有利ということを聞いたとか、とても単純な動機でした。けれど、経済学を勉強するうちに、ニュースや新聞で報道されている内容に、自然に興味をもつようになりました。それまで手に取ることが少なかった経済にかんする本を、自主的に購入し読むようにまでなりました。」

紺野：「経済学は世の中で起きている多くのことに深く関係しています。そうした点から、国内・国外にかかわらず、多くのことに関心をもてるようになりました。たくさんのことを学びたいならば、経済学部を選択することをお薦めしますね。」

越後：「北海学園大学経済学部の授業には、どのような特徴がありますか？」

小林：「大講義では先生が一方的に話しているので、その点では高校の授業と大きく変わらないと思います。けれども、ゼミがとれるようになってからは、それまでの印象とは大きく変わりましたね。」

紺野：「高校の授業と同様に、一方的に話す、聞くという形式の勉強をすることの重要性がなかなか理解できませんでしたね。そんな中、学生の考えを聞いてくれる授業、いいかえますと学生参加型の授業は、大変役立つと思います。」

越後：「今お話にあったような学生が主体となる授業が、いわゆるゼミナール（通称、ゼミ）というもので、これが高校までの授業にはない、本学部の授業の大きな特徴といえると思うのですが、今日参加されている皆さんは、それぞれ学年が異なりゼミ活動の経験が異なりますけれども、ご自身のこれまでの経験から、ゼミに対する感想を教えてください。」

大西：「僕は2年生なので、まだゼミは半期しか経験していませんが、勉強もさることながら、その他の部分での経験はとても大きかったです。たとえばゼミ単位でソフトボール大会へ参加したのですが、練習・試合を通じてゼミの仲間との絆を深められたことが大きな財産となりましたね。」

小林：「さきほどもいいましたが、大学は自主的に勉強する場であると思っていたのですが、それができるのがゼミ活動でした。3年生のときにゼミ論文を作成したのですが、そこで自主的に勉強することの重要性・意味を知ったように思います。」

ゼミ生座談会

ゼミナール活動のススメ

越後：「小林さんは4年生ということで、就職活動もひと段落ついたところだと思いますが、ゼミ活動を通じて得られた経験がどう生かされましたか？」

小林：「就職活動では、エントリー・シートという、いってみれば自己紹介カードのようなものを作成し、企業へ提出します。どこの企業のエントリー・シートでも、大学時代、何を専門的に学んできたかということを書く欄が設けられています。したがって、就職活動をするには、ゼミ活動をしていることが第一条件となるのです。」

紺野：「自分の意見を人前でしっかりと表現する力をゼミでは養うことができると思います。わたしは3年生なので、就職活動を経験したわけではありませんが、そうした力は、社会で最も必要とされるもののひとつであると思います。それとわたしの所属するゼミは今年、東京の中央大学で開催される「全国ゼミナール大会」に参加します。それは簡単にいいますと、全国の大学の経済・経営・商学系のゼミが、それぞれひとつのテーマを研究し、報告し合うというものなのですが、今はその準備に追われています。失業問題に焦点を当て、現在は実際に街でアンケート調査を実施している最中です。研究に要する多くの知識を得ることはいうまでもなく重要なのですが、それ以外にも、そこで出逢った人たちとの会話を通じて、学ぶことが多くあります。これらは新聞やニュースで頻繁に見聞きする問題なのですが、生の声から得られるものは、やはり違うなぁと思います。若年層の雇用にかんする問題の大きさがリアルに実感できたと思いますね。フィールド・ワークの重要性をあらためて認識しましたし、それを体験させてくれるゼミの時間の重要性も実感しています。」

小林：「繰り返しになりますが、ゼミでは自分で自主的にいろいろなことを調べなければなりません。就職活動も同様で、自分が関心を寄せている業界のことなどを、自分で進んで調べる必要があります。そうした意味でも、ゼミで培った自主的姿勢はとても役立ちましたね。そして、ゼミの活動を通じ、相手から自分の聞きたい情報を得、そして自分の考えを相手に伝えることを繰り返してきたことが、企業面接でも役立ちました。これこそが企業の営業活動の本質であり、その基本が身についていると大きな評価をいただきました。」

越後：「なるほど。就職活動では数人でグループを形成し、特定の題材についてディベートさせ、その参加姿勢や自分の意見を相手に伝える力などを評価することがよく行われるとも聞きますよね。大学で勉強し、身につけたことが社会で役立たないと批判されることが多いのですが、実際はやはりそうではないのですね。」

大西：「明確に自己主張できることは、社会で最も必要とされている力だと思います。僕は今年の夏に、地域研修プログラムに参加し、白老町と栗山町へ出かけます。そこでさまざまな人たちとコミュニケーションをはかり、多くのことを学んできたいと思っています。」

小林：「今の若者に欠けているといわれているコミュニケーション能力を伸ばす絶好の機会がゼミにはあると思いますね。」

紺野：「みなさんのおっしゃるように、単なる知識の習得ではなく、社会人として不可欠な力を得られるチャンスが、大学の授業にはあると思います。社会人に求められる能力形成の場として、大学はとても有意義なものであると思います。」

越後：「今日参加された皆さんは学年が2年生、3年生、4年生とさまざまですが、今後、ゼミ活動を通じて、学んでゆきたいと思っていることを教えてください。」

大西：「地域研修を通じて、北海道の各地域のかかえる問題を学んでみたいと思います。そしてそこでの出会いを大切にし、多くのことを吸収して自分自身、成長できればいいなぁと思っています。」

小林：「私には少し計算高いところもありまして（笑）、これまでのゼミ活動では、とくに就職活動に役立つであろうことに重点をおいてがんばってきました。ですから今後は、就職した後に役立つであろうことに力点をおいて勉強してみようと考えています。ゼミ活動以外でも、たとえば語学の勉強とか。」

紺野：「教養をより高め、社会で通用する人間になれるようがんばってゆきたいですね。いろいろなことを学べるのは大学時代だけだと思っています。だから、今を大切にしてゆきたいと思います。」

参加者：小林義和（本学経済学部経済学科4年生）
紺野祥子（本学経済学部経済学科3年生）
大西崇之（本学経済学部地域経済学科2年生）
司会役：越後　修（本学経済学部専任講師）

ゼミ合宿（地域研修）を紹介します

経済学部では多くのゼミで合宿を行っています。そのうち水野谷ゼミでは昨年の西興部村に続き、今年は登別での現地調査を3泊4日の日程で実施しました。主な内容は、温泉街の実態の把握とその将来に向けた一提言のためのアンケート調査でした。

①合宿の様子

今回の合宿のメインとなったのは、実際に登別温泉を訪れている観光客にA5版（両面）のアンケートに答えてもらい、それをもとに登別観光の実態を把握するというものでした。見ず知らずの方に声をかけ、観光中の足を止めてご回答いただくため、ご協力いただけないこともありました。むしろ断わられた回数のほうが多かったというゼミ生もいます。好天に恵まれ、絶好の調査日和（？）だった反面、このように精神的にもかなり辛い調査でもありました。しかし実際に生の声を聞くことは普段あまり経験できず、調査が終わっていま振り返ってみると、参考書や文献を読んで考えるよりもはるかに説得力があり、納得できるし、「これが実態なんだ」という実感とともに知識と理解を得ることができたので、とても貴重な時間でした。

「外国書講読」って、どんなことをやるの？

経済学部にはゼミのほかに外国書講読という授業が開講されています。学生のみなさんの声をご紹介しましょう。

ご登場いただく学生のみなさん

嘉村　直哉さん（英語、2年生、水野谷外書）

笹　　裕貴さん（英語、3年生、水野谷外書）

吉崎　総雄さん（英語、4年生、逸見外書）

春日麻依子さん（仏語、3年生、佐藤外書）

京田　麻以さん（仏語、3年生、佐藤外書）

大谷みさきさん（露語、4年生、二瓶外書）

酒井　博之さん（露語、4年生、二瓶外書）

小中出　圭さん（韓国朝鮮語、2年生、水野外書）

西路　拓矢さん（韓国朝鮮語、2年生、水野外書）

Q. 外国書講読を受講しようと思った動機は？

酒井：友人からおもしろいと聞いた。

京田：前年度に仏語をとっていてフランスの風土や文化を知りたかった。

笹：英語が好きだったので、読む力をつけたかったし、労働問題というテーマにも惹かれた。

Q. 授業ではなにを読んでいるか？

嘉村：ILOの報告書。

吉崎：ヴァリアンの練習問題。

春日：アルザス・シャンパーニュ地方の特色をしるした文献。フランスの地理・観光地にかんする文献。

酒井：先生自作のテキスト。日本にゆかりのある人々の記録。

Q. ふつうの外国語の授業との違いは？

京田：少人数で、意見を出し合える。

小中出：わからないところを細かく聞ける。

春日：読む題材が違う。地域のことをとりあげた文章など。

Q. 外国書講読の辛いところは？

春日：少人数なので、かならず当たること。

西路：辞書をひくのがたいへん。

笹：1年目はなにが書いてあるのかわからなかった。2年目になってだいぶ訳せるようになった。

Q. 外国書講読の楽しみは？

嘉村：自分の訳が正しいといわれると充実感がある。

大谷：少人数なので授業があっという間に終わり、ぜいたく。

小中出：ふつう外国語の勉強はみじかい文を少しずつやるが、韓国語はそうでなく、文章を訳してゆくので、頭ごなしに文法を覚えなくてよい点で、圧迫感がない。

Q. 外国語の文献を読んで得られたことは？

嘉村：経済学で使われる単語の意味。高校の英語とは違うものが多い。

吉崎：日本語で学んだものを外国書で再確認できる。たとえば経済学の講義で出てきた無差別曲線が〈indifferent curve〉だとわかり、漢字の語感からはなれたところで理解できること。

京田：フランスでのトヨタの営業実績など、経済にかんすることのほかに、お金の数え方や渡し方など、日本とフランスの違いがわかり、視野が広がった。

春日：フランスの学生の日本観や、どこの地方のワインがおいしいかがわかった。

西路：歴史について、韓国の見方と日本の見方が違っていることがわかった。

Q. 先生の指導は？

大谷：ていねいにゆっくり教えていただける。

西路：少人数で楽しい雰囲気にしてくれる。

笹：先生自身がご自分の訳を訂正するなど、先生も完璧ではないので、こちらの意見を聞いてくれる。

Q. 今後、外国書講読をとろうという学生にひとこと。

笹：内容に関心がないと辛い。講義概要をよく読んで決めるとよい。

吉崎：ただ英語の授業のつもりでとっても意味がない。文献を読んで「だから何なのか」という意識がないと何にもならない。

小中出：でも、先生とたくさん話ができるので、おすすめ。

②合宿の記録

8月15日（1日目）　登別へ移動。15時頃から、調査地域となる地獄谷や宿舎周辺の下見を行う。夕食後、翌日のアンケート調査についての最終確認。

8月16日（2日目）　朝9時、調査開始。地獄谷、くま牧場、温泉街など数か所に分かれて聞き込みを実施。昼食後、夕方の17時頃まで引き続き調査を実施した。夕食後は簡単な報告会と打ち上げ。

8月17日（3日目）　午前、第一滝本館の南氏の講演。午後からは3大テーマパークで5～6人ずつに分かれ、それぞれ実態調査。訪問先では施設の代表者の講演をお願いし、貴重なお話を伺った。

8月18日（最終日）　観光課の方々に挨拶をしたあと、10時過ぎに解散。

〔水野谷ゼミナール3年　宇田聖宣〕

経済学部2部の
学生生活を紹介します。

2部での学生生活を知ってもらおうと現役の学生に聞いてみました。登場するのは経済学部4年の大江潤美さんです。大江さんは滝川市出身で、高校卒業後、すぐに入学しました。現在は大学近くで一人暮らしをしています。

経済学部2部を選んだのは どのような理由ですか？

もともと、自分の中では、高校を卒業したらもう働くことのできる年齢だというイメージがありました。ずっと親に頼るのも納得がいかないですし。2部だと、学費は1部の半額だし、昼間に学費を稼ぐこともできる。やっぱり自分でできる範囲のことはやってみたいと思っていたんです。

実際親に頼らずに生活できている？

考え方の問題だと思います。実は、アルバイトの収入のうち、月4万円を回せば、年間の学費に近い金額となるんですね。それ以外を生活費に回して何とかやっています。とはいっても親に頼っている部分があるのは事実ですね（笑）。

アルバイトは どの程度やっているのですか？

ホテルのウェイトレスをやっているのですが、平均して1日8時間働いて、休みは月に7日。社員同然だと思われるかもしれませんが、自分では並はずれて働いているとは思いません。朝は6時からだったり、9時からだったり。正直言うとバイトが終わったあとは眠いですね（笑）。

アルバイトをやっていて、良かったこと、また大変なことはどのようなことですか？

やはり、ホテルで働いているので、そこで得た言葉使いや接客マナーは、他のところにいっても通用するのではないかと考えると、仕事も苦になりません。また、年齢も近い人がいるので楽しくやっています。それと、大変なこととはいえないかもしれませんが、こちらにきたばかりの18歳の時から同じ場所で働いているので、一緒にやっていた人が結婚や就職でやめていくのがつらいといえばつらいですね。

大学での様子に話を移したいと思いますが、今は講義はどの程度とっていますか？

今は授業は週に6日、午後5：50分から1時間30分の講義が毎日2つづつ入っています。

かなり大変ですね。仕事の後で学校に来るのが大変な時もあるでしょう？

そんなことはないです。ただ、1年生の時は、仲の良い友達がやめていったり、大学に慣れるのに時間がかかってしまい、なかなか大学に来ることができませんでした。2部でもサークルも入っている人はそれなりにいますが、サークルには入るつもりはなかったですし。そういう意味では、カリキュラム上3年生から始まる少人数のゼミは、1年生あるいは2年生の段階から取れるようにしてもらってもよいと思います。

気に入っている講義はありますか？

ゼミが一番おもしろいですね。お互いに発言しあうという意味では、自分の小学生の時の授業を思い出します。もちろん内容は全然違いますが（笑）。やはり討論しあえる授業は聞いているだけの授業よりも頭に入ってくるし、熱中できます。

全体として、講義の雰囲気は どうでしょうか？

2部には社会人もいるし、いろんな年齢層の人もいる。ゼミや講義でそういった人たちと接することができるのは2部に所属することの大きなメリットですね。教員も、自分の体験を手かがりとして講義の内容に入ってくれるケースが多く、授業にはいっていきやすい。好奇心がわくような授業が多いと思います。ただ、2部は学生数が少ないので、閑散とした雰囲気となってしまう講義もあります。小さめの教室を利用するなど、講義の一体感がでるような工夫もしてほしいですね。

これまで経済学を勉強してきて、特にどんなことに関心がありますか？

ゼミで環境ビジネスについて論文を書こうと考えています。特にメーカーの廃棄物削減がどのように経営改善に結びついているかについて興味があって、現在は資料収集などを行っています。

忙しい毎日だと思いますが、休みの日はどのように過ごしていますか？

週一回、英会話を習っています。あとは、DVDを見たり、好きな音楽を聴いたり。スポーツも全般的に好きですね。もちろん、ゼミの発表前なら、パソコンとにらめっこです（笑）。

最後に2部への入学を考えている人に一言

2部には、自分のように高校卒業後すぐに入学する人もいれば、サラリーマンの方や自営業の方もいる。このような多様な世界の人と接することですごく視野が広がると思う。また、カリキュラム上、1部と学習内容はほぼ同じだし、1部以上に吸収できることもあると思うので、2部も候補にいれるのは、皆さんにとってプラスになると思いますよ。

ありがとうございました。

研究室の窓から

一人は万人のために
万人は一人のために

前号からの新企画「研究室の窓から」では、いま先生たちが取り組んでいる研究テーマや実践について報告してもらいます。
今号は**太田原髙昭先生**の報告です。

「協同組合組織論」を担当して

私は、ながい間、農協など協同組合の勉強をしてきました。現在は「協同組合組織論」という授業を持たせていただいています。そんな関係で、昨年から山田定市先生の後を受けて、協同組合「コープさっぽろ」の非常勤の会長を務めております。

コープさっぽろはバブル崩壊後の不況のあおりで10年ほど前に経営破綻の寸前までいきました。金融機関からの融資がすべてストップし、ふつうの企業だったら間違いなく倒産していたでしょう。その危機を救ったのは組合員と全国の生協の仲間です。組合員は、新聞が毎日のように生協の経営危機を報道する中で60億円の増資をしてくれました。日本生協連合会は多額の融資と優秀な経営スタッフを提供してくれました。

その後、血の出るような努力の末にV字回復を遂げることが出来ましたが、この経過を振り返るとき、つくづくと協同組合の有り難さを感じます。授業ではこうした経験をありのままに述べて、協同組合と一般企業の違いを実感的に理解してもらうよう努めております。

コープさっぽろ農業賞

経営に余裕が出てきたので、少しは生協らしいことをしようということで「コープさっぽろ農業賞」を創設しました。これは消費者の目線で「かくあって欲しい農業者」を表彰するという趣旨で、第一回の昨年は全道から96件の応募がありました。この中から「知事賞」「会長賞」をはじめ10件の入賞者を選んだのですが、結果はたいへんユニークなものとなりました。

農業賞には「日本農業賞」や「ホクレン夢大賞」などいろいろありますが、これらはたいてい地元農協の推薦が必要です。農業者にはさまざまな理由で農協を利用しないいわゆる「農協離れ」の人がいますが、こういう人は今までの農業賞の対象になることはまずありませんでした。ところが「コープさっぽろ農業賞」ではこうした「農協離れ」の人達がたくさん選ばれました。

農協への問題提起

たとえば「知事賞」に輝いた北見の北原さんは、40年間無化学肥料、無農薬の有機農業を続けており、生協では「北原さんちのタマネギ」が目玉商品になっています。こうした商品を農協に出荷すると、農薬を使ったふつうのタマネギと一緒にされて卸売市場に送られ、同じ値段しかつきません。したがって生産者はその価値を認めてくれる出荷先を自力で開拓し、生協の産直事業と結び付くことが多いのです。

コープさっぽろ農業賞は、はからずもこうした農業者に光を当てる役割を果しましたが、同時に農協の事業の在り方を見直すきっかけにもなりました。私は農協に呼ばれて話をする機会も多いので、おおいにこのことを取り上げ、「消費者からみてかくあって欲しい農業者が農協では異端者になっているというのは随分おかしな話ではないか」と問題提起をしています。

消費者と生産者を結ぶ

ではいまの農協の仕組みではこういう生産者の商品を扱えないのかというと、そんなことはありません。やはりコープさっぽろと産直関係にある岩手県のある農協は、市場流通に頼らない新しい売り方を積極的に開拓し、同じリンゴでも品質によって量販店の店頭で売るリンゴ、生協の協同購入用のリンゴ、デパートの贈答用のリンゴと売り先を変え、それぞれ品質に見合った価格を実現しています。

農協から離れていた生産者も、実は売り先の開拓や代金回収を自力ですべて行うことは大変な労力です。だから農協の方がこうした努力をすれば、いったん農協離れした生産者も戻ってくるのです。いま消費者のニーズは大きく変わりつつあり、しかもきわめて多様化しています。いったん出来上がった事業パターンに安住せず、多様化した生産者と消費者を適確に結びつけるための絶えざる努力が肝要なのです。

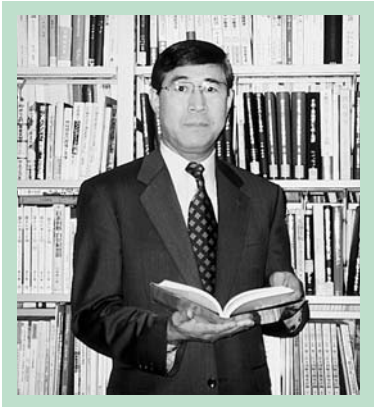
協同組合という生き方

いま北海道では「食の安全・安心」をキーワードにして、新しい消費者と生産者の関係を築き上げ、北海道の地場産業を守るための取り組みが官民挙げて行われています。その中で生協も農協も、これまでの在り方から脱皮した本来の協同組合としての本領を発揮することが求められています。

「万人の万人に対する闘争」ではなく、「一人は万人のために、万人は一人のために」を旨とする協同組合精神は、こういう世の中だからこそますます大切になっていると思います。こういう生き方を北の大地にしっかりと根付かせるために、大学と実社会とのつなぎとなる研究室にしたいというのが私の夢です。

私の履歴書

ふりがな	こだ　きよし	男
氏　名	小田　清	女



十勝平野から雄大な日高山脈を眺めながら

皆さんは日高山脈の十勝側にある、あるいは襟裳岬の右上で黄金道路の終点に位置する人口約1万人の広尾という町をご存じでしょうか。1984年にはノルウェー・オスロ市から海外初の「サンタランド」に認定され、クリスマスカードの取り次ぎでも知られておりますが・・。1960年代前後までの交通手段はSLが主で、広尾から札幌までは約10時間近くかかりましたが、今は「高速道央・日高道」から通称「天馬街道」を経て約4時間で広尾町の北西部に着きます。この天馬街道の十勝側の入り口に広がる、サイロや牛舎が立ち並ぶ酪農地帯が私の生まれ育った地域です。雄大な日高山脈をバックに、広大な森林地帯と牧草地帯の中を通過する十数分間は、自分が故郷に帰ってきたことを実感する最良の時間帯でもあります。

実家が酪農業を営んでいた関係もあり、中学校までは大自然の中で、友達とよく遊んだことを思い出します。休日は家事手伝いがほとんどでしたが、時間があれば川での水泳や魚釣り、ブドウやコクワ狩り、山スキーなどをしておりました。ただ、本を読むことが好きだったので、図書室の小説や伝記物は全て読破（乱読）したことを記憶しております。

高校生活は「反抗心」で生きてきたように思います。その反動で、勉強よりも運動クラブや応援団活動、学校祭のバンド演奏や演劇活動など、思い残すことがないくらい好奇心で次々と何にでも挑戦しました。今でも、当時の「真面目な優等生」に会うと「自分もやりたかった」とうらやましがられます。当時は、特に意識してそうしたわけではないのですが、結果的にはこの精神的に充実？した、後悔しない生き方が、その後の進路（人生）にプラス思考で作用したと思います。しかし、勉強不足の付けは、高三時の進学先をめぐっての悩みとなりました。家計のことを考えると学費の安い国立大学へ。しかし、不勉強がたたって合格可能性は低い。浪人する余裕はない。結局、学費が安く、合格確実ということで北海学園大学経済学部へ進学することを決めました。ずいぶんといい加減な人生の選択であったと、今考えると冷や汗ものでもあります。

経済学への目覚め

大学生活は大学まで徒歩15分の2食付き下宿で始まりました。講義には欠かさず出席しましたが、教養部の1年目はかなり退屈で、多くの講義が高校時代の授業の再版に思われました。今思うと、自分の生き方にフィットした新鮮で目新しい講義を見い出す能力が不足していたのでしょう。その中でも鮮明に記憶しているのは「日本史」で、通年講義なのに「日本書紀・神話」で終わり、「この講義何なの？」と思ったものです。試験は確か「天照大神」の説明であったように思います。今日では「授業料返せ！」ものですが、それがあたりまえの時代でした。

教養部2年目に入り、下宿の先輩（3年生）が学部の専門ゼミに所属し、猛烈に勉強を始めた。そして、素人の自分に「学問・経済学とは何か」と「付け焼き刃的？」に議論を仕掛けてくるようになりました。教養部所属とはいえ、自分は経済学部生である。しかし、「経済学」は不勉強で「国富論」「資本論」などの中身は何も知らない。恥ずかしい。私の反発心が目を覚ました。経済学やそれに関係する哲学書などの解説書・専門書を先輩の話を聞きながら手当たり次第に買い求め、乱読し始めた。飲み代や遊ぶ金はすべて本代に費やされた。この時は本当に沢山の本を読んだと思う。やがて理解不足ながらも少し議論できるようになってきた。すると、経済学のおもしろさが増幅してきた。同時に下宿の先輩が幾つかの評判の良い、よく勉強するゼミを教えてくれた。ただし、「評判の良いゼミは希望者が多いので落ちるかも」とのアドバイスを受け、事前に先生の研究室を訪問し、ゼミの見学をお願いした。この努力の結果、晴れて池田善長ゼミ門下生となった。同じような思いで、研究室訪問・ゼミ見学をした人が他に3人いました。彼らとは今でも特別の付き合いです。

「地域開発論研究」との出会い

当初、池田先生が「地域開発論研究」の第一人者とは全く知らなかった。それを知ったのは「TV討論会」にたびたび登場して自説を主張する姿や、時々の地域問題を「新聞」紙上で解説する記事を見てからであった。

先生の講義やゼミナールでは、地域矛盾や格差の是正に関し、「地域開発の二面性とその統一」を政策原理として、北海道経済や地域開発のあり方などを展開しておられた。すなわち、「地域」は人間生活に必要なものをすべて含むが、今日の地域開発政策は経済成長至上主義で、自然環境や生活面が軽視されている。経済成長は誰のためになされるのか。地域住民の質的な生活向上があってこその経済発展ではないのか。このためには、行き過ぎた

私の履歴書

経済開発に規制を加えてでも生活面（社会開発）との両立を図るべきであるとの論である。

高度経済成長が最高潮に達し、各種格差が拡大しつつあった当時、田舎で生活した実体験から「地域間格差の所在・矛盾」を何となく肌で感じ、ほぼストレートに理解できた。また、池田先生の「二面性統一」の論理は高成長以前からの持論であり、時流に乗っての「評論家的」でないところに「ブレがない本物」の魅力を感じ、この時期から私の「地域開発研究」が始まることになったのである。振り返れば、高校時代の「反発心」と「不勉強」とが池田先生と地域研究との出会い、ゼミ仲間との深い付き合いの始まりでもあった。（写真前頁中：福島大学にて。前頁下：ゼミ仲間と。1968年）

大学院から研究者・教育の道へ

卒業年を迎えた夏休み頃、本学に大学院経済学研究科が2年後に新設されることを知り、先生の勧めもあって大学院に進み、さらに地域開発研究を深めることになった。研究テーマは「わが国における地域開発理論への発展途上国理論の適用について」という理論研究であったが、日常的には他大学や試験研究機関の研究者とのフィールドワークが多く、地域問題の基礎・基本理論を批判的な視点から先輩方に徹底的にたたき込まれた。最初の頃は「地域研究を深めたい」という漠然とした思いであった。その後、北海道を中心とした地域開発研究を進めていくうちに、「博士課程進学で研究者の道を」が目標として明確になってきた。

当時の地域研究は北大農学部が大先達であり、池田先生と指導を受けた多くの先輩の出身学部ということもあり、農学研究科農業経済専攻博士課程に進学することになった。指導教授は農業市場論の権威でもあった川村琢先生であったが、当時の川村ゼミは研究の内容を農業経済に縛ることなく、日本経済の諸問題を幅広く自由に議論していた。これが私にとっては幸いした。私の研究テーマは「地域開発と大規模公共事業の位置」というもので、地域研究では相変わらず池田先生に教えを請いながらも、同時に経済理論や日本経済等を勉強することができた。川村先生の退官で指導教授は代わったが、指導方針は変わらなかった。

その後、博士課程を単位取得満期中退し、新設の北海学園北見大学商学部に勤務することになった。新設時から大学づくりにかかわった経験は、教育・研究者としての心構えの原点として今に生きているかも知れない。学生へのサービスの大事さ、大学の社会・地域貢献の大切さ、教授会自治の重要さ、怠ることのない自己研鑽など、学んだものは多かった。7年間の北見生活の後、幸運にも母校に戻ることになったが、北見時代に培った大学人としての「心構え」は終生忘れないであろう。特に最近では、忙しさを理由に「教育・研究の社会的役割」をおろそかにしてはいけないことに注意を払っている。

晩秋の頃、わが故郷からは収穫の終わった畑や茶色の樹林帯のはるか上の方に、真っ白に雪化粧をほどこした三角形の楽古岳などが、十勝晴れの青空に浮き上がるように美しく見える。また、初冬の日高山脈は白と青のコントラストがはっきりとし、特に雄大に見える。子供の頃から大好きな風景でもある。この山脈の向こう側にはどんな世界が広がっているのか。山を越えて向こう側を覗いてみたい。子供の頃からそんな夢を持っていたような気がする。そんな気持ちが無意識の内に、札幌への進学を選択させ、「地域研究」に向かわせたのかも知れない。（写真：ゼミ1期生とのコンパにて。1985年）

経　歴	
1947年	北海道広尾町に生まれる
1965年	北海道立広尾高校卒業
1969年	北海学園大学経済学部経済学科卒業
1972年	北海学園大学大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程修了
1977年	北海道大学大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程単位取得中退
1977年	北海学園北見大学商学部講師
1981年	北海学園北見大学商学部助教授
1984年	北海学園大学経済学部助教授
1986年	北海学園大学経済学部教授
1998年	北海学園大学開発研究所所長
2005年	北海学園大学経済学部長
1980年	農学博士（北海道大学）

主な著書

『地域開発政策の課題』（編著1983年）、『開発計画と地域政策』（1995年）、『地域開発政策と持続的発展』（2000年）、『地域ルネッサンスとネットワーク』（共著2005年）など。

現在の研究テーマ

「持続可能な地域経済社会をどのようにつくるのか」

学生諸君へ

厳しい偏差値教育の中で、いろいろな選択肢に悩みながらも本学の経済学部に入学したからには、プラス思考で4年間の学生生活を充実させてほしいと思います。何をやっても無駄なことはありませんが、自分の人生にプラスになるように明確な理由を持って行動して下さい。無目的に勉強・部活・アルバイトをすると自分自身の良さが失われます。理由を付けて自分の行動と個性を際立たせて下さい。そのことが今を、明日を生きることにつながるはずです。